2010 年 5 月 26 日放送

漢方医人列伝 「和田東郭」

北里大学東洋医学総合研究所　漢方鍼灸治療センター

副センター長　　伊藤　　剛

今日は、江戸時代の代表的折衷家である和田東郭についてお話します。

東郭は江戸時代中期の寛保 3 年、つまり西暦 1743 年に、摂津の国、今の大阪府高槻市に生まれました。和田東郭の名は璞といい、東郭はその号です。

そのころの日本の医学はというと、1679 年には名古屋玄医が金元医学ではなく、秦・漢・唐の時代の古医学の重要性を唱え、その主張は後の後藤艮山、山脇東洋、香川修庵へと受け継がれていきました。一方、1738 年には吉益東洞が、張仲景の『傷寒論』『金匱要略』以外を排斥した先鋭的な古医方を唱えるようになりました。東郭が生まれたのは吉益東洞が 42 歳の時であり、このように後世派が衰えはじめ、古方派が台頭してきた時代でした。

東郭の父親は名を祗忠といい、高槻藩の瘍科つまり外科の医官でしたが、父により東郭は本道、今で言う内科を専攻させられ、幼少の頃から伊丹に在住する竹中節斎（せつさい）のもとで勉強させられました。少し大きくなると、今度は当時の大坂で名医として知られていた戸田旭山（きょくざん）という医家のところに入門させられました。

この戸田旭山は後の東郭の生き方に大きな影響を与えた人ですので、少しご紹介いたし

ます。

旭山は備前で生まれた武士でしたが、家督を弟に譲り、京都で医業を始めました。しかし患者はまったく来ず、極貧のため按摩をするなどして艱難辛苦の末に大坂で開業する機会を得て、それで成功を納めた人です。

旭山は純然たる後世方の医家でしたが、古方派の香川修庵の『薬選』を批判したりするほど本草学に詳しく、その医術は特に「湿邪」つまり水毒を重視するものでした。また、非常に忠誠心が厚かったことでも知られており、こうした旭山の医術と精神は、病人を救う医学に忠誠を誓う、つまり病人を救うことが医学の目的であり、そのための医術に誠心誠意打ち込む忠誠を誓う「誠の医学」を実践した東郭に、多大な影響を及ぼしたと考えられています。

しかし、そうした東郭も若い時分には時代の流れや向学心には抗しがたく、1768 年、26 歳の時に意を決して戸田旭山のもとを去り、古方派の吉益東洞に入門します。しかしその 1 年後には戸田旭山が病死し、東郭は大事な師を失うことになります。

入門した当時の吉益東洞の医術は、『傷寒論』や『金匱要略』のみを拠り所とするだけでなく、「万病一毒説」のように、すべての病因は「毒」にあるとし、その毒を取り去るには「巴豆」、「大黄」、「石膏」などを多用する徹底した攻撃的治療を行っていました。そのため驚くほど奇効があるかと思えば、治療により命を落とす場合もあり、東郭も東洞流の医学を熱心に学び、古方を極めていく中で、古方の秀でた治療を一部認めつつも、こうした東洞の激しい治療に疑問を持ち始めました。

そうこうしているうちに入門 6 年目、東郭 31 歳の時に、吉益東洞が亡くなるという非運が訪れます。しかし東洞が亡くなった後も、東郭はそのまま東洞流の古方を続ける気になれず、かといって後世方にも戻れなくなっていました。

そこで東郭が出した結論が後世方であれ、古方であれ、民間療法であれ、患者を治すためなら有用なものは何でも取り入れ、「一切の疾病の治療は、古方を主として、その足らざるを後世方等を以て補うべし」という見解に至ったのです。ここが、後世方の処方を用いる時は後世方の理論で処方し、古方の処方を用いる時は古方の理論で処方するといった他の折衷家とは異なる東郭独特の見解なのです。

この東郭の治療は中庸を重んじ、吉益東洞のように激しいものではなく、温和な治療法であったため、その後も後世派や折衷派の医師たちの間に広く浸透していきました。その後、東郭独特の折衷家としての医術は百々漢陰、有持桂里、浅田宗伯など日本の傑出した漢方医に大きな影響を及ぼしました。

一方で、東洞のところに入門したことがきっかけとなり、東郭は斎宮静斎という京都の儒学者の門人になります。静斎は「医学は古経方、特に『傷寒論』を中心にすべきである」と主張し、中庸を尊び、『傷寒論』を重視するこうした静斎の考えは東郭に多大な影響を与えたと考えられます。

その後、東郭は二条公に仕えた後、寛政 9 年、1797 年には御医となり天皇にお仕えする

ことになりました。当時、子ができない中宮を東郭に診察させたところ、その原因は「久寒」つまり慢性的な冷えがあるためで、附子などで温めるのがよいと診断しました。東郭の言うとおりに治療したところ、はたして翌年に皇子が誕生し、この功績により東郭は寛政 11 年、1799 年に医師としては最高位の法眼に叙せられました。しかし 4 年後の享和 3 年、1803 年に東郭は病により亡くなり、京都の東鳥部山に葬られました。享年 60 歳でした。

ところで、和田東郭の著書は多く、細野史郎氏の研究によるとおよそ 28 部存在するようですが、なかには内容がほぼ同じものもあり、重複しない内容のものは 15 部あり、しかも刊行されたものは 6 部にすぎないようです。しかもこれらのうち東郭自身が執筆したものはなく、そのほとんどは口授（口述筆記）によるものです。

それというのも、治療の術の妙は、筆でも口でも現わすことができず、ただひたすらに患者を治すことに誠を尽くし、一心不乱に治療に専念して初めて会得できるものであるとの信念から、東郭自身は自らの医術を書き残さなかったからです。

比較的重要な書籍に『蕉窓雑話』、『傷寒論正文解』、『蕉窓方意解』、『腹診録』、『脈診一家伝』などがあります。『蕉窓雑話』は、東郭に関する書籍の中では最も読まれたものだと思います。

東郭の塾の窓前に芭蕉の木が植えられていたことから名付けられたとされるこの書籍は、東郭の没後 19 年目に門人たちの手で刊行されたものです。この初編には「東郭先生医則」という一文が載っていますが、この医則こそ、東郭のただ一つの遺稿とされています。

また東郭は五臓のうち特に“肝”を重視したことから、肝実の陽証には四逆散を使うなど、柴胡剤の中でも特に四逆散の運用については、『傷寒論』を上回る臨床効果に関する記載が多くあります。実際、『傷寒論』での四逆散の運用に関する記載はごく少なく、今日わが国における漢方治療での四逆散の使用法は、この和田東郭によって発見されたものも多いのです。

その他、冷えによって起こる“疝”における“肝”の重要性を指摘したり、“水毒”による難病の治療をライフワークにしたり、さらに脈診においては、東郭は古方で行われていた寸関尺による寸口脈診法ではなく、もっぱら後世方で行われていた三部九候法を用いていたようです。東郭独自の医術や精神がこれらの書籍よりうかがい知れます。

このように漢方医学を中国の理を重んじる医学から、わが国の実を重んじる医学へと変換させた東郭の功績は大きいものがあります。現在わが国では、古方や後世方の処方を患者の症状に応じて当たり前のように用いていますが、東郭によりこうした漢方医療の基礎が築かれたといえるかもしれません。

また「医への忠誠」を誓い、現代の漢方医学に大きな足蹠を残した和田東郭の精神と医術から、今日、漢方医学のみならず西洋医学においても、非常に学ぶべき点があるのではないでしょうか。